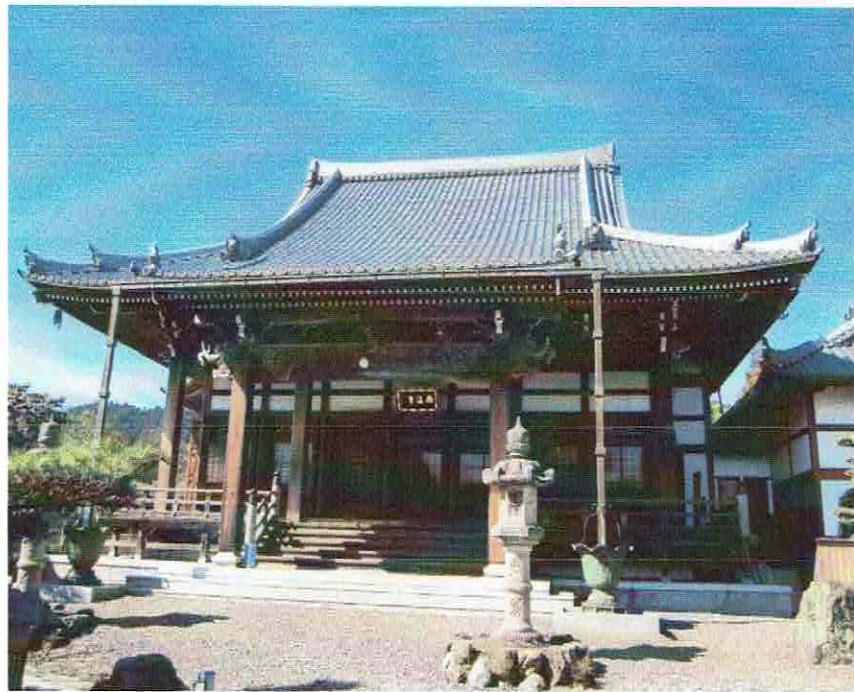


源重成（前賢故實から）

源重成の主君 源義朝



不破郡垂井町栗原 西法寺



知多郡美浜町野間 法山寺の境内

令和三年 十二月二十七日 水野 隆生

西法寺の寺額は源重成書

一 はじめに



垂井町栗原にある真宗大谷派西法寺の本堂の正面には、羽林次將源重成書という寺額が掲げてある。源重成は一体どんな人物か。源という姓から源氏にゆかりのある武将ではないかと思い、手始めに、インターネットで検索すると、「前賢故實」と、「前賢故實」を発見する。よつて、ここに調査結果を項目別に原稿にした次第である。

源重成は平安時代末期の武将である。父は源重実、母は勾当大夫宗成女という。重実の長男または次男として生まれる。別名は佐渡式部大夫、八島重成・佐渡重成と言う。この八島は美濃国方県郡（稻葉郡）八島郷（現、岐阜県羽島市・大垣市八島町・岐阜市八島町）を指し、佐渡は安八郡佐渡村（現、大垣市東町）を指している。死没は平治元年（一二五九）十二月二七日、二九歳である。

官位は、従五位下、大炊助（律令制で宮内省に属し、諸国から米などを司る役所、大炊寮の次官）、兵部少丞（律令制下の八省の一つ。軍事防衛関連事項の一切を司る役所の職名）、昇殿（平安時代以後、清涼殿の殿上の間にのぼることをいう）には勅許が必要で、公卿でも勅許なしに昇殿することはできない。

主君は源義朝で、一一五九年の平治の乱では敗軍となる。側室との間に長男の義平、次男の朝長、正室由良御前との間に三男の鎌倉幕府初代征夷大将軍頼朝がいる。

二 源重成の出自と官位

源重成は平安時代末期の武将である。父は源重実、母は勾当大夫宗成女という。重実の長男または次男として生まれる。別名は佐渡式部大夫、八島重成・佐渡重成と言

重成^{やしま}・佐渡^{さわたり}

三 源重成の生涯

保元元年（一一五六六年）三月、重成は後白河天皇方に加わり、第一陣の平清盛、源義朝、源義康の出撃後、源頼政、平信兼と共に第二陣の将の一人として出撃している。この保元の乱で、重成の属する義朝軍は崇徳上皇方に与した父為義を斬首し、後白河天皇方の勝利に貢献する。

その後、従五位下・式部丞に任せられ式部大夫を称す（『兵範記』）。乱の後、捕らえられた敵方の崇徳上皇を仁和寺から鳥羽付近まで護送している。

平治元年（一一五九年）十二月、平治の乱において、重成の属する源義朝らは藤原信頼方に参加する。

この時、重成は信頼軍が一時拘束した後白河上皇を源光基・季実らと共に護送し、さきの崇徳上皇の例と合わせて「二代の上皇を護送した」として世上大きな話題になつてている。

しかし二条天皇が六波羅御幸すると、藤原信頼らは賊軍に転落し、攻め寄せてきた平清盛軍と交戦する。その戦いに信頼軍は敗れ、重成は義朝とともに僅かな人数で東国を目指して落ち延びる。『平治物語』によると途中、美濃青墓で二百人ほどの落武者狩りが押し寄せた際、主君義朝を逃した上で「我こそは佐馬頭義朝なり」と叫び正体を隠すため自ら顔の皮を剥いだう

え腹を十文字に割いて自害する。

注 重成の出自と官位、生涯はフリー百科事典ウ「イキペディア」を参考にする。

四 羽林次将

羽林次将とは古代の官職で、近衛府の中将・少将の唐名、鎌倉幕府二代将軍源頼家を意味している。近衛府は兵仗（ほこ）を帶して禁中（平安京では内裏の内郭、宣陽門・承明門・陰明門・玄輝門の内側）を警衛し、また朝儀に列して威容を整え、行幸の際には前後を警備し、皇族や高官の警護も職掌としている。

五 祇園闘乱事件

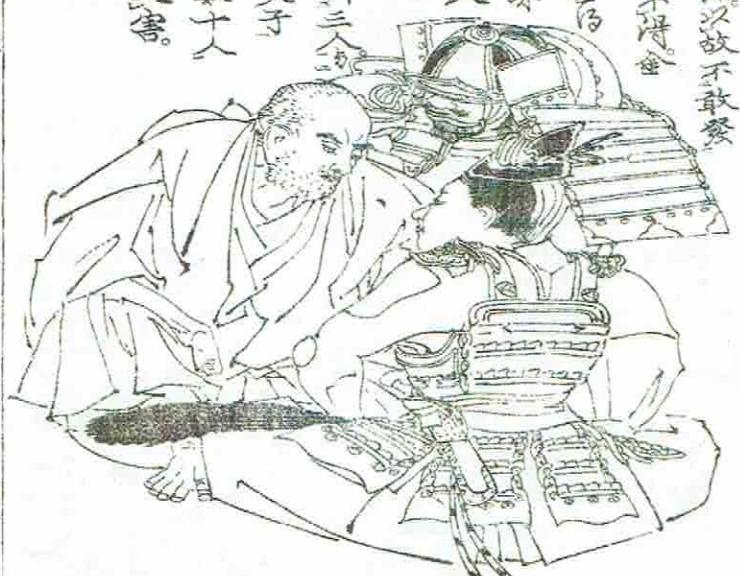
久安三年六月十五日（一一四七年七月十四日）に祇園社の神人と平清盛の郎党が小競り合いとなり、宝殿に矢が当たり多数の負傷者が発生した事件。平忠盛・清盛父子の配流を求める延暦寺の強訴の引き金となつた。この鬪乱事件のとき、京武者十六人の一人に源重成がいて、延暦寺宗徒の入京阻止に動員されている。

六 前賢故實にある源義朝・源重成の最期

注¹ 前賢故実 第六巻の源重成の原文は以下である。

源重成。澠谷金王。驚屈源光。源義朝敗卦東國注1。至
 美濃。兵皆潰散。式部丞重成。鎌田政家。澠谷金王等統流。
 有向闕。辛楚。區青墓驛。富姫大炊家。邑人聞之。群起圍之。
 重成曰。我當死於此。草騎衝突。射殺十餘人。遂入林中。詐稱
 義朝。自榜其面。割腹而死。殊是義朝得脫。欲往野間內海。然
 道路梗塞。不得進。大炊有元平三真遠。刺嬖稱驚屈源光。素
 被聞。遣政家金王相謀。源光諾之。具舟載義朝政家等。
 積柴覆之。自秣嶺川過折戶津。吏疑止之。發矢如雨。源光曰。船
 杖入船搜索。源光意欲令義朝自裁。故謂曰。義朝雖奔敗。不
 者不下三十騎。何以竄火柴船中。張往不為卿等獲。必自殺耳。
 束去。明日達內海。長田忠政待之厚。忠政政家之婦翁也。而其子景
 致。勸父謀殺義朝政家。及三日夕。易具湯沐。伏壯士三人於浴室。刺
 小村

金王操兵侍浴。以故不敢發。
 義朝求浴水。不得。金
 王自往取之。壯士
 間而入。義朝赤
 手。擣朴一人。二人
 自左右刺殺。
 金王走還。立斬三人。
 源光竟。忠政父子
 不獲。乃殺傷數十人。
 而去。政家亦遇害。



源重成。澠谷金王。注2驚屈源光。注3
 源義朝注4敗注5于東國注6。

赴き、美濃に至る。兵皆潰散する。式部丞重成・鎌田政家・
 澠谷金王等は続いて後から従う。辛苦を問い合わせた。

注7青墓驛の富姫大炊家に身を匿める。邑人このことを閉す。

注8注9注10

しかし、群集まつて之を囮む。重成曰く。我當にここに於いて死すべしと。単騎で撃つて出て十余人を射殺する。遂に林の中に入る。そして、義朝と詐り称えて、自らその顔面を傷付り、腹を剝^{えぐつ}死す。^{注13}是によつて義朝はこの場を脱すことが出来た。^{注14}野間・内海に赴くことを欲する。然れども道路は塞がれ前に進むことが出来ない。大炊には兄平三真遠がいる。剃髪して鷺栖源光と称している。^{注15}素より俠^{わざ}をもつて聞こえている。政家、金王を遣わし相謀る。源光之を承諾する。船を準備し義朝、政家等を乗せ、柴を積み、これを覆う。株瀬川より折戸を過ぎる。^{注16}津の官吏が疑いて之を止める。^{注17}叢矢雨^{そうや}^{注18}の如し。源光船をまわし、管吏が船に入り捜索する。源光は、ここで殺されるより義朝を自決させたいと思つた。よつて、謂いて曰く。義朝奔敗すると雖も亦従者は二、三十騎を下らない。何を以つて芝船の中へ伏せ竄れる必要があろうか。^{注19}縱え在りとも（義朝が舟中についても）、^{注20}郷衆の為に捕まらない。必ずや、確かに自害するのみ。吏去



る。次の日内海に達する。長田忠致^{まさ}之を厚くもてなす。忠致は政家の妻の父なり。しかれども、その子の景致は父に勧め、義朝・政家を殺すことを計画する。三日の夕に及び、湯沐浴^{ゆあつ}を準備する。^{注21}壯士三人が湯室にひそみ、義朝を刺すこのとき、金王、兵を従え湯殿の隣に控えておあり、故にもつてすぐに行動（殺すこと）を起こすことができなかつた。義朝は浴衣を求めるも得られず。金王自ら之を取に行く。壯士ひそかに入る。義朝は素手（武器を持たずに）一人を打ち倒す。二人は左右より義朝を刺殺す。金王は走りもどり、三人を立ち斬る。源光と忠致父子を搜すが捕らえられず。そこで数十人を殺傷して去る。政家も亦、殺害に遭う。

* 源義朝の画像はインターネットから使用

注 1

前賢故實（ぜんけんこじつ）は、江戸時代後期から明治時代に刊行された伝記集。全十巻二十冊。菊池容斎筆。上古から南北朝時代までの皇族、忠臣、婦人など五八五人の時代を追つて肖像化し、漢文で略伝を記してある。

注 2

金王丸（こんおう）は、母（源為義の妻）の生誕地の美濃国恒富郷（安八郡輪之内町）で生れている。義朝が殺害されると愛妾・常盤御前にその死を伝え、その後出家して土佐坊昌俊と名乗る。ただ、後に、源義経を襲撃した人物かは不明。

彼は、一一八年の墨俣川の戦いで討死した義円を弔い、羽島市足近町に西方寺を再興する。

注 3

鷺栖（わしづ）玄光とも書く。養老町鷺巣に住んでいた。大炊（青墓長者）の弟。

一一五九年十二月九日に起こった平治の乱。

注 5

潰散（かいさん） 爭いや戦に負けてちりぢりになること。

注 6

鎌田 政清（かまた まさきよ）は、平安時代

末期の武将。名は正清、正家、政家とも。藤原秀郷流首藤氏の一族で、相模国の住人鎌田権守通清の子。源義朝の第一の郎党。政清の母が義朝の乳母だったため乳兄弟として最も信頼された。

主君と今後辛苦（生死）を共にすること。

注 7

注 8

驛（うまや）律令制で、中央と地方との連絡のため街道筋の約十六キロメートルごとに置かれた設備。馬・人夫をそろえ旅人の便をはかつた場所。

注 9 富姫（ふうおう）宿場を仕切る姫（遊女）。

注 10 大炊家青墓長者兼遠のこと。大炊の娘に延寿がいる。

注 11 義朝の側室が延寿でその娘が夜叉御前。

注 12 ただひとり馬に乗つて突き当たること。
義朝の噂を聞きつけた村人らが「落人を討て」と大勢集まるのこと。

注 13 児安の森 現在の赤坂の子安神社辺り。

注 14 現 愛知県知多郡美浜町野間。

注 15 男らしい気質。

注 16 杭瀬川のこと。

注 17 船附付近の川の検問所 折津とも書く。

注 18 湊 水の門（陸上の検問所）。

注 19 草むらから矢が一斉に飛んでくる様。

注 20 仮定法。

湯でからだを洗つて清めること。

注 21 長田忠致に頼まれた勇ましい大力の橘七五郎が義朝を抱え、弥七兵衛・濱田三郎が刺し殺す。

注 22 舅の長田忠致と酒を飲んでいた政家は、義兄弟の景致に斬られる。

源義朝一行の敗走経路

六波羅の合戦に敗れた源義朝一行はわずかに三十数騎となつて琵琶湖畔の堅田の浦へ。舟で対岸に渡ろうとしたが風が強いためやむなく引き返して勢多（瀬田）を目指し、目立たぬようになると考へて同行の波多野義通、三浦荒次郎義澄、斎藤別当實盛、岡部六弥太忠澄、猪俣小平六範綱、熊谷次郎直実、平山武者所季重、足立右馬允遠元、金子十郎家忠、上総介八郎広常ら二十数名に暇を与えた。残つたのは悪源太義平・中宮大夫進朝長・右兵衛佐頼朝の三兄弟と佐渡式部大輔重成、平賀義宣（義信）、郎党の鎌田政家・従僕の金王丸のわずか八騎となつた。

勢多を過ぎ、野路（草津市）の辺りで頼朝が遅れて脱落し落人狩りと斬り合うなどの事件もあつたが、野洲河原で何とか追い付き合流。やがて鏡の里（竜王町）を過ぎ、平家方が固めている筈の不破の関を避け北へ迂回した。馬と武具（源氏重代の鎧・義朝の源太産衣・義平の八龍・朝長のおもだか）を捨て伊吹山麓の雪の中を歩き、小関を経て青墓宿に入った。青墓の長者大炊は古くから義朝の縁者で、大炊の娘・延寿は義朝の寵愛を受け夜叉御前（当時十歳）を産んでいる。

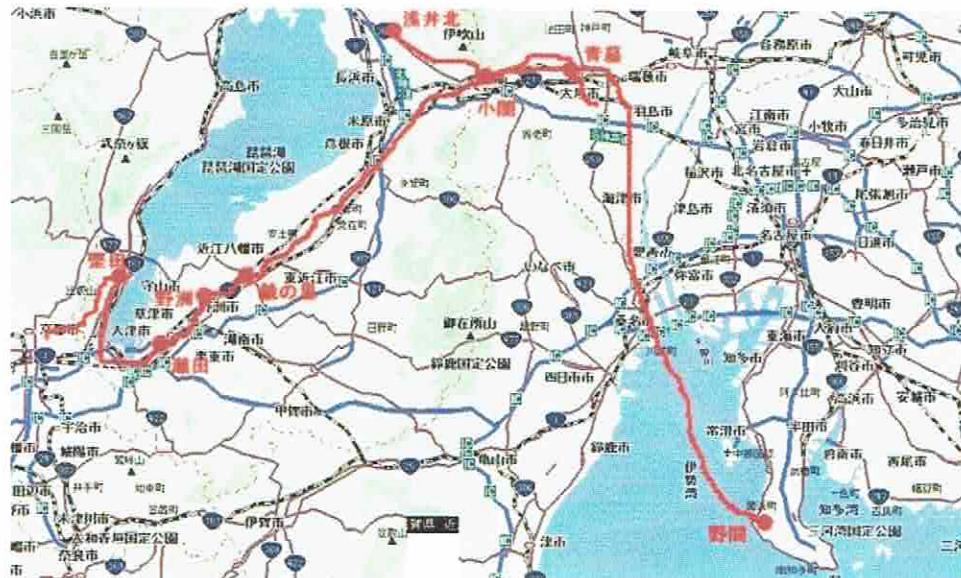
頼朝は小関の手前・伊吹山麓の辺りで脱落、道に迷つた挙句小関とは反対方向の北浅井で老夫婦（『吾妻鏡』によると近江国の草野定康）に匿われ、数日の後に青墓にたど

り着いた。しか

しこの頃には義朝は青墓を出立し知多の野間で殺されている。

平治物語に抛れば、頼朝は青墓を出て一ヶ月ほど後に閑ヶ原で捕縛され六波羅に送られてい

る。
源頼朝の処刑は確実であつたものの、平清盛の繼母・池禪尼の嘆願などにより助命され、伊豆国へ流されてい



簡略すると

『平治物語』によると、北国で兵を集めよと父義朝に命じられた義平（義朝の長子）は、越前国足羽まで下っている。

信濃へといわれた朝長は、龍華越（りゆうげごえ）で比叡山の僧兵に射られた太ももの傷が痛んで歩けなくなり青墓に舞い戻っている。

足手まといになるより父上の手でと願つて首を差しのべ念佛を唱える朝長を義朝は涙ながらに斬り殺す。そして義朝の噂を聞きつけ、恩賞目あてに押しよせた土地の者らを、佐渡式部太夫（源）重成が自ら義朝と名乗り、奮戦自害する間に義朝主従は青墓宿を出ている。僅か四人となつた義朝一行は、鎌田政家の舅、尾張国野間（現、愛知県知多郡美浜町）の領主、長田忠致の許に身を寄せるため、その世話を大炊の弟で養老の滝近くの鷺栖村（現、養老郡養老町鷺巣）に住んでいた鷺栖玄光に頼んでいる。玄光は義朝主従を柴舟に乗せ、杭瀬川から知多半島の先端野間まで漕いでいる。

義朝と鎌田政家、平賀四郎義宣（よしのぶ）、金王丸の四人です。源氏の家人である長田忠致・景致（かげむね）父子は、義朝らをさまざまにもてなすが、恩賞目当てに裏切り、入浴中の義朝を謀殺してしまう。舅と酒を飲んでいた政家は、主の一大事を聞き走り出す所を義兄弟の景致に斬られる。平治二年（一一六〇）正月三日のことです。義朝三十八歳、無念の最期。「ここに一振りの木太刀ありせ

ば・・・」非業の最期を遂げた義朝の悲痛な叫び声が聞こえてくるようだ。

追記

- ① 長男源義平、久寿二年（一一五五年）に叔父の源義賢（木曾義仲の父）を討つことで武名を轟かせている。乱後、義朝とともに都を落ち後、義朝と別れて東山道から東国を目指すが、義朝の死を知ると都に戻つて清盛の命を狙う。しかし、捕えられて六条河原で斬首されたと伝えられている。
- ② 三男源頼朝は、乱後、義朝とともに都を落ち、途中で一行とはぐれて、一人で逃亡を続けていたが、平宗清に捕られ六波羅探題へと送られる。

源頼朝の処刑は確実であったものの、平清盛の繼母・池禅尼の嘆願などにより助命され、伊豆国へ流されている。

もしも、頼朝が一行とはぐれずに、尾張国野間まで同行していた鷺栖玄光に殺されたかもしけなし、逃亡後捕まえられた頼朝に平清盛が処刑を命じていたら、その後の歴史が大いに変わつてくる。

③ 平賀義信は、義朝が尾張国野間で長田忠致に殺害された後は、信濃へ落ち延び、その後に頼朝が鎌倉に武家政権を樹立すると、その麾下に入り、源氏一族として御家人筆頭となつている。

④ 酒宴の席で長田親子にだまし討ちにされた政家の妻は夫・正清の刀を胸にあてて自害している。

七 源氏橋

⑤ 源頼朝は父義朝の菩提を弔うため勝長寿院を建立し、文治元年（一一八五）九月三日、義朝と鎌田正清（政家）の遺骨を埋葬している。（『吾妻鏡』）。

⑥ 平家滅亡後、義朝の子の頼朝が征夷大将軍となり、野間で亡父義朝と正清の菩提を弔うため大法会を催した。それに先立ち、長田父子を亡父の墓前で磔にして殺したという。

⑦ 源義朝には、次の九人男子と女子がいる。

側室三浦義明の娘（橋本の遊女）の間に長子 義平。

側室波多野義通の妹の間に次男 朝長。

正室由良御前の間に三男 頼朝・四男 義門・五男 希義。

側室遠江国池田宿の遊女の間に六男 範頼。

側室常盤御前の間に七男 阿野全成（今若は出家して醍醐寺へ）・八男 義円（乙若は出家して圓城寺へ。一一八年の墨俣川の戦いで平重衡に敗れて討死。）・九男 義経（牛若は十歳になつて鞍馬寺に。）。

側室延寿（大炊長者兼遠の娘）との間に夜叉御前。

二月一日の夜、夜叉御前は一人青墓を出て遙か遠くの杭瀬川に行き、まだ十歳というのに身を投げて自害）。

⑧ 伊吹山南麓の小関は、『平治物語』の中で、義朝が東国に逃走する際に、抜けたという関であり、これに対し不破の関のあつた松尾地区を大関と称し、後に大関を関ヶ原と呼ぶようになる。

「美濃明細記」は多芸郡飯ノ木（養老町）の源氏橋について記している。義朝が都を落ちて青墓の長者の許に来り、それより青墓の東の榎戸村の地を流れる小金川を小舟で下り、飯ノ木村で渡つた橋を源氏橋といつ。この源氏橋から

尾張国野間

へ落ち延びたとされている。この記述から、義朝は青墓から直ちに杭瀬川へ下つたのではないことになる。このとき、道案内を大炊兼遠の弟で鷲巣村に住んでいた鷲巣玄光に頼んでいた。玄光は武勇の



ほまれ高い人で、養老町飯ノ木辺りにある源氏橋から主従五人、柴舟に乗せて杭瀬川を下り、鎌田政家の妻の父長田忠致の家に向かう。この飯ノ木村には家来の鎌田政家が鎧を脱いで掛けた松があつたと伝えられている。

注 「美濃明細記」から

注 青墓宿から直接、杭瀬川に渡る説もある。

八 東山道の青墓宿

東山道の宿駅。平安時代から鎌倉期にかけて遊女や傀儡子（かいらいし）人形を操つて生計を立てる芸人のいる宿として著名。保元の乱後斬られた源為義の子、乙若・亀若・鶴若・天王の母は青墓長者の姉である。平治の乱に敗れた源義朝は、青墓の長者大炊の娘延寿との間に夜叉御前をもうけていた縁で青墓に逃れ、大炊の兄弟の内記平三真遠（驚栖源光）の努力によって尾張国知多郡内海に落ちのびている。また、義朝の子朝長は青墓で自害している。このよう青墓の長者と源氏との関係は深く、鎌倉幕府成立後、源頼朝は建久元年（一一九〇）に上洛する途中青墓に立ち寄り、青墓の長者大炊やその召し出しに、祝儀を与えていた。

九 常盤御前に源義朝の死を知らせた金王丸

『平治物語』によると・・・

一一六〇年（平治二年）一月五日朝、源義朝に仕えていた金王丸が、常盤御前の許にやつて来た。馬から飛んで下り、

しばらくは涙に暮れていた金王丸。

そして、「この三日の夜明け前に、尾張国野間で、長田忠致によつて、義朝様が討たれました」と伝えた。聞き終わらないうちに、涙ぐむ常盤御前と幼い三人の子どもたち。金

王丸は、朝長（義朝の次男）と源義隆（義家の七男）が討たれることも伝えた。金王丸の話を聞いた常盤御前は、三人の子の行く末を案じて伏してしまったが、金王丸は泣きながら、

「義朝様は、道中、子どもたちのことだけを心配しておられたので、誰かが知らせなくてはと思い、取るに足りない命をながらえてやつて来ました。

義平様（義朝の長男）も頼朝様（義朝の三男）も、捕らわれてしまつたでしよう。幼い子たちはさらに望みがありません。

ならば、長年お供した私が僧となつて、義朝様の菩提を弔うつもりです」と言つて、立ち去つたのだといふ。

その後、常盤御前と三人の子は、大和国に逃れた後、平清盛のいる六波羅へ出頭。助命され、長男の今若是醍醐寺で、次男の乙若是園城寺で出家。三男の今若は、常盤御前が再婚した一条長成に育てられ、十一歳の時に鞍馬寺に預けられた。義朝の長男義平は、六条河原で斬首。三男の頼朝は、伊豆国の大島に流された。

そして、金王丸は、出家して土佐坊昌俊と名乗つたのだという。

十 京都の安居院(あぐい)西法寺

京都にある西法寺は浄土真宗本願寺派に属する。文禄二年（一五九三）、僧明円（みょうえん）が安居院を再建し、名を西法寺と改めて真宗寺院としたものである。安居院とは、この近くにあつた比叡山延暦寺山内の竹林院の里坊のことである。平安時代の末期以来、安居院には名僧が住み、中でも澄憲（ちようけん）僧正（藤原信西の子）、聖覚（せいかく）法印（信西の孫）らが唱導（神仏の功德を説いて信仰を勧めること）の技術に優れ、以後、代々受け継いで安居院流の唱導を作り出したことで有名である。十四世紀頃に神社の縁起を集めた「神道集」がこの流派の人々によって作られた。聖覚の墓は当寺の境内にある。

なお、文禄二年、明円和尚が安居院を再建したとき、本山から頂いた寺号が「西法寺」の始まりという。

ここにある藤原信西（通憲）は平安時代後期の貴族、学者、僧侶である。源義朝は、平清盛が持つ軍事力を警戒していた為、清盛が都をあけている隙を狙つて武装蜂起する。そして、一一五九年に清盛が、熊野参詣中に、義朝は軍勢を率いて御所を襲撃。後白河上皇と二条天皇を幽閉し、十二月十三日に信西の自害に成功する。

注 康治二年（一一四三）に藤原通憲（みちのり）から出家して信西（しんぜい）と名乗っている。

追記 澄憲法印（一二一六～一二〇三）

平安時代後期から鎌倉時代初期にかけての天台宗の僧。父は藤原通憲（信西）。蓮行房・安居院法印とも号する。珍兼に師事して天台教学を学び、初め比叡山北谷竹林院に、その後は竹林院の里房である安居院に住む。平治の乱では下野国に配流となつたが、まもなく帰京している。

澄憲は説法唱導の名人として知られ、安居院流唱導（安居院唱導教団）の祖とされている。その父譲りの知識から来るわかりやすさ、そして美声は「富楼那尊者の再誕」「説法の上手」と評され人びとを惹きつけ、多くの聴衆の感涙を誘つたと伝わつてゐる。

法然上人に帰依し、法然門下に澄憲の息子の聖覚がいる。また、弟弟子に親鸞聖人がいる。聖覚を尊敬して親鸞は、聖覚の安居院流唱導の技術を手本に、浄土真宗の庶民布教を行つてゐる。

十一 栗原清水寺の寺歴

茲に濃州不破郡栗原郷象鼻山は往昔天台宗九十九坊の古跡にして今尚山中に九十九坊の字名を存有せり

夫れ当山は往古天台宗九十九坊の一院御本尊は十一面觀世音菩薩なりし恵心僧都の御作なりしと聴き居たり

建武年間（一二三三～三六）新田氏足利氏南北朝の戦い数年たり

この時建武二年（一三三五）



五月十八日足利勢兵焚の乱により伽藍悉く皆烏有に皈し当時の寺鐘は現在知多市金沢区八社神社に社宝として祀れる（陣鐘）

其後年代を経ること久し

延徳（一四八九～九一）明応（九一～一五〇一）の際臨済宗の名僧大道真源禪師再興二世亨仲和尚三世竹庵和尚四世の法脈中絶し唯寺有るのみにして数代歴遷する凡そ百六十年間なり。萬治三年（一六六〇）庚子（かのえね）の年宝鑑国師古利（由緒ある名高いお寺）の煙滅を惜み徒弟魯教主座を当山に留錫（りゆうしやく）・僧が行脚中に一時、他の寺院滞在すること）せしめ再興を命ぜしと

爾來穆州（ぼくしゅう）和尚遷化（せんげ）・高僧の死）後數代を経遂に留守寺となり果て

昭和四十九年四月二十九日不審火に依り本堂弘法堂庫裡等全焼す

注 写真は古川英治氏の所蔵

追記 真源禪師（東陽英朝）（一四二八～一五〇四）

室町時代の臨済宗の僧。大徳寺五十三世住持、妙心寺十三世住持を務め、妙心寺四派の一つである聖沢派の開祖となる。土岐持頼（もちより）の次男として美濃国加茂郡（現在の岐阜県加茂郡）に生まれる。五歳の時に天竜寺の玉岫英種について出家し、後に師について南禅寺へ参禅するようになる。三十歳を過ぎてその元を離れ龍安寺初代住職の義天玄承に師事するようになった。長禄年間、川辺町下麻生の臨川寺を開く。義天玄承は東陽英朝が龍安寺に参じるようになつて数十年で没し、その後は雪江宗深を師とした。一四七八年（文明十年）に印可を受けた後、雪江宗深が住持をしていた丹波国竜興寺の住持となる。一四八一年（文明十三年）に大徳寺の住持となるが、翌年竜興寺へ戻る。その後、尾張国瑞泉寺の住持となり、さらに妙心寺へ移つて一四八九年（長享三年）から三年間同寺の住職となる。妙心寺の住持となつていた延徳年間、岐阜県瑞浪市陶町の林昌寺を開いていた。

妙心寺の住職を辞した後、一四九二年（明応元年）に美濃国加茂郡の不二庵へ移り住む。後に不二庵は改築、改称されて大仙寺となつた。その後岐阜定慧寺の開山となつたほか、各務原少林寺の再興に携わった。一五〇四年（永正元年）、少林寺にて遷化。塔所も同寺にある。一六五三年（承応二年）、大道真源禪師と諡された。

十二 おわりに

栗原西法寺は、一四九七年初代栗田順誓氏によつて創建されていて、本堂入口に掲示された寺額は平安末期の武将源重成の書とある。となると、重成は平治元年十二月に亡くなっているので、三百数十年後に創建される栗原西法寺を想つてこの寺額の字を揮毫していない。重成は京都禁中の警備をしている関係から天皇家と身近に接することでのきる職に就いている。書した時期は羽林次將があるので、久安三年の祇園闘乱事件後と思われる。

この寺額一つから知り得たことは源重成が保元の乱では勝ち組に、平治の乱では負け組に与し、源頼朝の父義朝の家臣で、一緒に戦つたということである。また、「前賢故実」より、美濃青墓で二百人ほどの落武者狩りが押し寄せた際、主君義朝公を逃した上で「我こそは佐馬頭義朝なり」と名乗つて青墓にて自害したということである。

さて、青墓の元円興寺には源朝長、義平、義朝のお墓があり、周りには自害した家臣の五輪の塔が祀られている。八百数十年前に起きた平治の乱は最初の源平合戦と言われている。平家に追われた義朝一行にいた重成が生きていた痕跡はこの西法寺という字にある。垂井町にも源氏にゆかりのある場所を発見できることは大変有意義なことであり、その歴史を考えると文化財的な要素を持つ額と感じている。

東国に赴く際に、源重成はふるさと美濃国青墓宿をいつも訪れている。このとき、栗原山に住んでいた僧侶と何らかの繋がりがあつた重成は、山麓にある宿坊を「西法寺」と命名し、以来この書は当地に残つていたのではないだろうか。

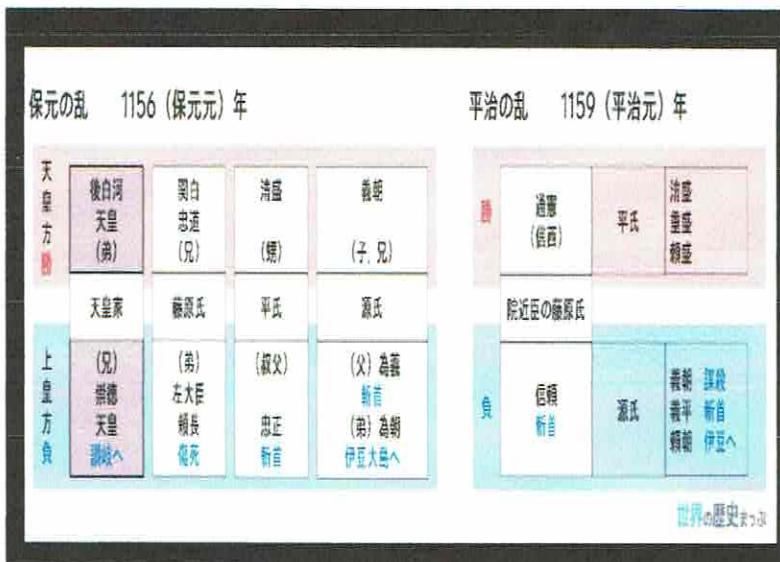
建武二年（一二三三五）に足利尊氏と新田義貞両氏の戦いで兵火にかかり、多くの宿坊は焼失したが、この書は機敏な僧侶により焼失を免れた。初代順誓氏は美濃国不破郡栗原村で寺を創建するとき、平安末期に書かれた重成の書を当地で発見し、これを寺号となされたと推測できないこともない。

あるいは、清水寺（焼失）の寺歴には明応年間に臨済宗の名僧大道真源禅師（東陽英朝）が山寺を再興したとある。禅師は京都妙心寺の住職を辞した後、一四九二年（明応元年）に美濃国加茂郡の不二庵へ移り住んでいた。一四九七年に禅師と栗田順誓氏が何らかの関係があり、臨済宗西法寺が創建されたとき、禅師が平安末期からあつた源重成の書を栗田順誓氏に寺号として渡したと考えられないこともない。

しかし、現在ある西法寺の寺額に源重成と書いてあるのはなぜかの究明には至っていない。今後、何らかの古文書等の発見があることを願いたい。

十三 參考文献と資料

- 前賢故実の第六巻（国立国会図書館）。



⑤ 青墓長者一族と源義朝の関係図

